

18節の御言葉は、11節から始まった教えのクライマックス、頂点、頂。キリスト教の神髄がここにある。高さ、驚き、感動の箇所。これが本当に分かれば、私達の信仰と教会の革新、愛と賛美が生まれる。主の教会とは、すべての目的と目標が、「キリストによって、一つの御霊において、父のみもとに近づくこと」であると理解している人々は幸いである。非常な壮大な内容が、この一つの御言葉に凝縮されている。深く理解するために、時間を割き、思い巡らしたい。

I この御言葉は、聖なる三位一体の神の奥義に向き合わされる。

三位一体の教理がキリスト教信仰の本質。私達は、唯一、一体の真の神を信じ、しかも、この神は三位格すなわち父、子、聖霊なる神であると確信している。父、子、聖霊は互いに愛し合う交わりの神（創世記1：26、ヨハネ17：21）。

II 聖なる三位一体の神が、私達に関心を持たれ、共に私達の救いの為に働かれている恵みが先行している。世の人は、あこがれている大物の人にお近づきになれることを非常に喜び。私達は、それ以上の比べられない恵みを与えられている。全世界で最も大物の三位一体の神が、私達に関心を持ち、私達の為に御業を成され、この素晴らしい神に私達が近づける、お近づきになり、親しくお交わりが出来るといふとんでもない恵みである。

III 私たちを救って下さる偉大な御業を三位一体の神は、分担された。

人間が墮落する前、「世界の基の置かれる前」、永遠の時に重大な会議を開かれ、分担された。

1. 父なる神は、偉大で栄光に満ちた救いのご計画者。

「神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。…御心によりご計画のままをみな行方の方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです」1：4、11。御父の私達への大きな愛ゆえの救いのご計画。

2. 御子なる神は、父なる神を愛し父なる神の御計画に進んで従われた。御父への愛と私達への愛の故。御子なる神は、進んで、私達の救いというご計画を実行、成就する為にこの世に来られた。救いの実行者、成就者。御子なる神は、「神と等しくあられた」のに、「神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。…実に十字架の死にまでも従われたのです」ペリピ2：6-8。最高に富み、最高の位におられた御子が貧しくなられた。御子は、罪人たちの恨み、悪意、ねたみ、ののしりを引き受けられた。私達の罪を負い、ご自身を犠牲にされ、私達の罪の為に、身代わりに、償いのいけにえとなられた。御子は、罪多く不完全な私達の為に、律法を全うされた。「やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです」ヘブル9：12。御父、御子の愛に感謝します！

3. 聖霊なる神の救いの御業。イスラエルのゴルゴタで御子が完了、成就された救いを、世界中の人々、私達に届けて下さる方、適用して下さる方、当てはめて下さる方。御子は自ら進んで父なる神に従い救いのご計画を成就された。そして、聖霊なる神も、ご自身を御父と御子に従われた。

私達の救いの為に。ペンテコステの日に御聖霊が来られて、世界中の人々に、そして私達に、御子が成就された救いを私達に届け、当てはめ、適用して下さい。この尊い御業がなければ、完成された救いも私達に届かない。御聖霊は、私達に私達の罪とその為の主の十字架の意味を心に示して下さい。しかも、御聖霊は、私達個々人にだけでなく、教会を霊的な命と臨在で満たして下さい。御聖霊は、自分から語られるのではない。ただキリストの事を語られる。「御霊はわたし(御子)の栄光を現わします」ヨハネ16:14。

IV 救いの最終目標は、私達が、神を父として知るようになり、自分の罪故に永遠に滅んで

当然の私達が、その偉大で愛に満ちた御父に永遠に近づけるという驚くべき恵みである。

キリスト者達が、キリストによって、ともに一つの御霊において、父なる神に近づくことができる。ここに恵みの頂点がある。これまで語られた和解の恵みで終わりではなく、父のみもとに近づくことができる恵みがクライマックス。人間関係で和解しても、それ以上、親しくならない事もある。神との関係は違う。和解で終わりではなく、偉大で愛に満ちた御父に近づいて親しく交わる事が出来るという恵みがある。この「近づく」という原語は、「接近する」「紹介」とも訳せる。それは関係が回復されて行く事を意味し、私達が御父に受け入れられ、御父との親しい関係を意味する。御子は私達を御父に紹介し、連れて行き、手を取って導いて下さり、御父のもとに案内して下さい。これこそ真の救いの大きな目的！「私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所(御父の臨在に近づく所)にはいることができます」ヘブル10:19。

旧約聖書を読む(→大切。新約の恵みの深さが分かる)と旧約時代は、普通の人たちは聖所に、ましてや至聖所(神の臨在)に入る事は許されなかった。大祭司だけ許された。しかも年に一度だけ。その時、贖いの血を携えずに入る事は出来なかった。大祭司と血は、イエス様と十字架の血を指し示していた。主の十字架の血で私達の罪が完全に償われた新約時代は、私達は、キリストによって御霊において至聖所に入る=御父に近づくことが出来るのである。計り知れない恵み！

御父が本当に私達を愛しておられる事を知っているだろうか。

神の臨在を知り、感じ、認識しているだろうか。

子供が親の所に行くように、確信をもって、全幅の信頼を置いて御父に近づき祈っているだろうか。

純粋な幼子は親達が問題を解決してくれると信じ切り、全く安心しきってしまう。

御父と私達の関係はそのようなものだろうか。

私達の悩み、問題、苦しみを御父のもとに持って来るのを御父は喜ばれる。

御父にすべてを委ねる事を喜ばれる。

御父は受けとめ、みわざをなさる！